今週のテーマ　生活・文化

繊研教室 SENKENKYOSHITSU

先端多様性都市「メルボルン」

商い創造研究所・賑わい創研代表取締役　松本大地

20年2月にオーストラリア・メルボルンを訪れた後、オーストラリア政府は全世界に広がったコロナ禍対策で、翌3月には国境閉鎖を宣言した。メルボルンでは世界最長の262日の長いロックダウン（都市封鎖）期間を経験したが、今回再訪したこの街は、コロナ前よりもさらに活力に満ちていた。

共存共栄する多文化

オーストラリアの国土面積はアラスカを除く北米とほぼ同じ大きさで、日本の約21倍の面積がある。人口は約2600万人で日本の5分の1ほどであり、全体の約8割がオーストラリア東部（ニューサウスウェールズ州、ビクトリア州、クイーンズランド州、首都特別地域）に集中する。22年6月時点ではニューサウスウェールズ州都シドニー都市圏が人口530万人で第1位、ビクトリア州都メルボルン都市圏は502万人で第2位だったが、人口急増と一部エリアを編入したこともあり、今年4月にはメルボルンの人口が約580万人となり、シドニーを1万9000人ほど上回った。

メルボルンは英国エコノミスト誌にて「世界で最も住みやすい街」ランキングの第1位に連続7年で選出されるなど、日常の暮らす価値を大切にすることで住みやすい都市（Livable City）として成長を続ける。街にはダイバーシティー（多様性）、サステイナビリティー（持続可能性）、ウェルビーイング、ウォーカブル、ミクストユース、アートフル、ローカルファーストの要素があふれる。ダイバーシティーは人種や性別、年齢、宗教、価値観、障害の有無など、異なる属性を持つ人々が共存している状態を示し、お互いの考え方や個性を受け入れ、共に成長していく共存共栄社会の在り方を示す。その本質とは何か、真の多様性とは何かがわかる街だった。

多様性の歴史をひも解くと、1788年に英国の植民が始まり、1850年代のゴールドラッシュで移民が急増したが、2度の世界大戦では戦死者も多く国防や経済面からも移民受け入れ政策を進めた。ヨーロッパ、アジア、先住民であるアボリジニ文化も共生する多文化国家の道を歩み、現在は200を超える国・地域からの移民が暮らす。それぞれの文化を守りながらも寛容に重なり合い、魅力的な多文化社会が形成される背景もあって、メルボルンは多様な移民で作られた多様性、多重性が息づく街となった。

メルボルンのサブカルチャーを醸成するレーンウェイ・アート

新たな街路の風景

シドニーが経済中心の街、メルボルンは文化やアート中心の街と言われ、ダイバーシティー思想を育みながら人を軸にしたヒューマンな都市生活が築かれる。日本の閉塞（へいそく）した社会を変えていく発想や実証が数多くあるが、今回は街なかのパブリックスペースの使われ方、パブリックアートの質の高さから、街が一つのキャンバスになった強さを紹介する。

コロナ禍で政策的に強化されたのは、飲食店前の車道を屋外席として利用する「パークレット」（Parklet）だった。市は車道との間に高さ90センチメートル以上の柵と、花などのプランターボックスを設置する安全性と美観に配慮したガイドラインを設定し、約190カ所を許可したという。実際に店舗の売り上げ増だけでなく、街の界隈（かいわい）性づくりに大きく寄与する新たな街路の風景になっていた。公共空間である街路をどう使いこなすかで、街のにぎわい創出や地域経済効果もあり、日本のウォーカブル政策でも大きな可能性があるだろう。

以前、「繊研教室」で紹介したのはアーケード（Arcade）とレーンウェイ（Laneway）。アーケードには130年の歴史があるエレガントな回廊もあり、パリのパサージュを超えた美しすぎる内装と店舗とが調和した小さな商店街。ゆったりとお茶を飲んだり散策したりする住民の憩いの場所であり、伝統を保ちながらも新しいものを受け入れる柔軟性もある。

一方、レーンウェイはビルの裏口にゴミを回収するのに作られた細い路地のことだが、アーティストに開放した壁画によって、周りにはサブカルチャー系のショップやカフェが集まる。今回の視察では、さらにパワーアップしたレーンウェイの存在を確認できた。年々アーティストが壁面に描く絵の質が高くなり、今や若者の先端流行発信地になっている。朝から夜までレーンウェイ巡りをする人も多く、レーンウェイを借景にした高級レストランやカフェも現れた。単なる無法な落書きとは一線を画したアートに昇華するのは、いかにその場所にふさわしいテーマや作風が描かれるかが重要なポイントになる。現地でヒアリングしたところ、「行政がアートプロデューサーを雇い、場所設定から誰にどのように描いてもらうかの全体をマネジメントしている」と話してくれた。その質の高いデザインコントロールにより、既にレーンウェイ・アートはポスターや絵葉書になり、若い人たちがメルボルンを訪れる目的にもなっている。

今回は土日に開催されたアートマーケットの「The Rose Market」を訪れた。道路ペインティングがされた区域の広場での、多彩な作家の作品が並ぶマーケットだ。ここでも地域全体で若い世代の新しい才能や思考を理解し、受け入れる姿勢があった。街なかに時代を担う若い人たちの表現の機会、心地よい居場所を育む大切さが我が国には足りていないと痛感した。

飲食店の売り上げ増と街のにぎわいをつくるパークレット

多様性の正しい理解

さて、我が国では少子化は喫緊の課題であるが、重要なのは「子育て世代にとって前向きな気持ちになれる居場所をつくること」ではないだろうか。メルボルンは都市面積の25%も公園があり、良質な図書館は自由滞留を促し、美術館や博物館はほとんどが無料で鑑賞できる。中心部（CBD）区間を走る路面電車は無料で乗車できるウォーカブルな街は、子育て世代にとっても日常の暮らしの居場所になっていた。

メルボルンで驚いたのは、高級レストランにも家族が赤ちゃんを連れて食事を楽しむ光景だ。時には子どもが泣いたりすることもあるが、周りの人たちは特別視するわけでなく、何事もないように同じ空間で楽しむ。郊外のショッピングモールのフードコートでは突然奇声を上げた子どもがいたが、誰も迷惑がった視線を浴びせることなく、当たり前のように過ごす姿もあった。

冒頭で述べた多様性を意味するダイバーシティー（Diversity）は何が本意なのかが、今回のメルボルンのライフスタイルを体験してやっと腑（ふ）に落ちた。多様性とは、「人々の優しさにより思いやりがつくられ、互いに尊重しあう社会」ではないだろうか。大切なのは私たち大人がダイバーシティーを正しく理解することだ。未来につながるソフトとハードの両輪が機能する街づくりを目の当たりにし、どちらを欠いてもならない表裏一体であると確信した。今、メルボルンは先端多様性都市のトップランナーを疾走する。

未来につながるソフトとハードの両輪

まつもと・だいぢ　マーケティング、プランニングから業態開発、プロデュース業務を推進。領域は最新のSCプランから街づくりにまで及ぶ。経産省コト消費づくり委員、鎌倉市アドバイザー、IFI（ファッション産業人材育成機構）講師。全国で街づくり講演や、米ポートランドのライフスタイル、街づくり研究から新たな時代潮流を発表。18年6月リアルメリットを研究開発する賑わい創研設立。著書に『最高の商いをデザインする方法』（エクスナレッジ社）。